平成30年度台東区協働事業提案制度採択事業

グローカルシネマ大作戦！

～世界90ヵ国の人が住む僕たちのまち台東区～

事業報告書

令和２年３月

一般社団法人リテラシー・ラボ

はじめに 4

企画提案の背景と問題意識 5

小中学生による映像制作事業 6
目的 6
対象者 6
手法 7
内容とスケジュール 7
参加者の感想 13
小括 15

映像作品上映ワークショップ事業 16
目的 16
対象者 16
実施形式とスケジュール 16
参加者の感想 16
小括 24

おわりに 25
今後に向けた検討課題 25
成果物 25
謝辞 25

はじめに

この報告書は、平成 30 年度台東区協働事業提案制度の採択事業「グローカルシネマ大作戦！～世界 90 ヵ国の人が住む僕たちのまち台東区～」の活動記録である。

本事業は、台東区と一般社団法人リテラシー・ラボによる協働事業として、地域における多文化共生の推進を目的に実施をした。台東区には、90 ヵ国を越える国と地域から 15,345 人[1]の外国人が移住し、区民人口における割合は約 7％を占め、東京 23 区では 5 番目の高さとなっている。また、両親のいずれかが外国出身者の外国にルーツのある区民を含めると、その割合はさらに高まる。多様な文化背景を持つ区民による地域づくりは、社会のグローバル化においてとても重要になる一方で、多くの課題に直面している現実がある。

言語によるコミュニケーションの問題や異なる文化習慣による誤解など、地域における課題の多くは、互いの文化背景への理解をする機会の欠如が原因によるものだと考えられている。本事業では、そうした相互理解の機会を、区内の小中学生の協力を得て創出することを試みた。

本事業は、二段階に分けて実施をした。第一段階は、小中学生による多文化共生をテーマにしたドキュメンタリー映画制作に取組んだ。そして、第二段階では、第一段階で完成した映画作品の上映会を開催し、作品上映と多文化共生について対話をするイベントを実施した。

国内における多文化共生施策では、外国人や外国ルーツの当事者を対象にした施策が数多く実施されているが、本事業は地域における相互理解の基盤づくりを目指した新たな取組みとなった。今後、この取組みがどのような意味を成すのか検証を試みたいと考えている。本報告書をご覧いただき、多文化共生の地域づくりについて、共に考える参考の一事例として読んでいただければ幸甚である

完成作品試写会後の参加者・スタッフ集合写真

[1] 令和 2 年度東京都統計

企画提案の背景と問題意識

本事業の企画提案団体である一般社団法人リテラシー・ラボは、市民が主体的に地域や社会に参画を行っていくきっかけづくりを、社会教育を中心として取組んできた。平成 30 年度台東区協働事業提案制度の公募においても、市民が主体的に多文化共生の地域づくりに参画するためには、どのような取組みが効果的であるかについて考え、提案を行った。

企画段階から重要視したのは、①子どもたちが在住外国人コミュニティに接点を持つ機会の創出、②子どもたちとの接点をきっかけに在住外国人が既存の地域コミュニティと接点を持つ機会の創出、の二点であった。この二つの視点を重要と捉えた理由としては、多文化共生に限らず地域づくりにおいて不可欠なことは、地域で暮らす当事者同士の相互理解と信頼関係の構築だと考えたからである。そうした関係構築のきっかけをどのように創出することができるか、また異なる文化背景を持った当事者を、どのようにつなぐことができるのか、それが今回の企画の入口となった。

台東区は、歴史情緒豊かな環境と多くの観光地を有する地域である。年間を通じて多くの観光客が国内外から訪れる魅力的な地域である。また、町会などの強固な地域組織が多く残っており、地域ごとの祭や行事も数多く維持されている。

映像講師と小中学生による協働

こうした地域性は外国からの移住者にとって大きな魅力に感じる一方で、既存の地域コミュニティに関わる障壁となる場合もある。既存の住民同士の関係性が濃密な分、新しい住民が地域コミュニティに参画する機会が限られていることや、言語、文化の問題から接点を持つことを避けるなど、双方が敬遠するケースも多くある。他方で、既存の地域コミュニティとしても、地域内の関係の希薄は、コミュニティ自体の弱体化につながり、地域の治安や防災、減災にとっても重大な問題につながりかねないことから、町会組織などをどのように維持していくかが大きな課題となっている。

こうした地域コミュニティの現状を鑑み、本企画では地域コミュニティに居住する当事者同士が「知る、触れる」ことのきっかけを創出する必要性があると検討を行った。また、そのきっかけの創出には、豊かな感受性と忖度のない意見を発信できる子どもたちの力を頼りたいと考えた。台東区で育つ子どもたちは、外国人や外国ルーツの子どもたちとの接点を既に学校組織などで多く有しているため、彼らが本事業に参加をし、そこから得た学びを発信することで、地域コミュニティに居住する様々な住民が多文化共生の地域づくりについて対話するきっかけになると期待をした。

小中学生による映像制作事業

目的

小中学生による映像制作事業においては、子どもたちが主体的に多文化共生について考え、区内在住の多様な区民と取材を通じて直接的に接点を持ち、映像作品を完成させることを目指した。また、子どもたちによる映像制作の過程の中で関与をいただいた取材対象者や協力者においても、多文化共生を考える機会の提供になることを期待した。

対象者

本事業における対象者は主に以下のグループとなる。

① 事業参加者

区内在住・在学の小学 5、6 年生・中学生に広く応募を募り、17 名が参加をした。参加者には、外国ルーツの子どもも含まれる他に、多文化共生や映像制作に関心の高い子どもたちが積極的に応募をしていただいた。本事業においては、参加者を三つのグループに分けて映像制作に取組んだ。

② 取材対象者

参加者グループのテーマ設定に即した区民の方々を取材した。区内在住・在勤・在学の外国人の方々や、外国人の方々と接点を持つ方々を中心に取材対象として検討を行った。

③ 協力者

本事業の実施に際して、映像制作期間外の準備段階から、日本語講師、区内日本語学校、町会組織、PTA 組織など多くの区民・団体にご協力をいただいた。地域における在住外国人の方々の現状や、地域コミュニティにおける課題など、多岐にわたるヒアリングを実施した。

小学生による映像制作事業参加者募集チラシ　左：表面　右：裏面

手法

本事業では、オーストラリアにおいて 2000 年から公教育で採用されているシネリテラシー（CINELITERACY）教育を参考に、子どもたちによる映像制作を活用した地域理解の取組みを実施した。オーストラリアでは、増加する移民人口に伴い、非英語圏出身者への国語教育（リテラシー教育）の手法として子どもたちが映画（シネマ）を制作することを推奨している。

国内においては、各地域において子どもたちによる映像制作の実践が展開されているが、本格的なドキュメンタリーの制作は限定的な取組みになっている。また、本事業において台東区が実施をした多文化共生をテーマにした子どもたちによるドキュメンタリー制作の試みは、国内における初めての実践となった。

内容とスケジュール

本事業は、全 6 日間の日程で実施をし、参加者が主体的に多文化共生の推進を目的とした事業に取組める設計を試みた。企画当初の計画においては、5 日間での実施を想定していたが、参加者がどの程度の意識と知識を持っているのかを把握することを目的にプレイベントとして事前のワークショップを実施した。

キーワードの見える化

プレイベントにおいては、アイスブレイクを皮切りにワークショップを開始し、事業名になっている「グローカル[2]」の言葉の意味を参加者と確認をし、事業の目的と取組む内容について説明を行った。その後、子どもたちが映像制作を行うことを、他地域における実践の映像記録[3]を鑑賞し共有した。さらに、「多文化共生」という言葉から連想される参加者自身の体験や経験などを付箋に記入し、参加者がその時点で思いつくキーワードの見える化[4]を行った。

鈴木美穂氏によるグローカルワークショップ

実質的な事業の開始となったグローカルワークショップでは、映像制作に入る前の段階として「理想の台東区」の状態を想像する機会の提供を試みた。このワークショップには、内閣府世界青年の船事業においてナショナルリーダーなどを歴任し国際交流に精通した国連工業開発機関（UNIDO）の鈴木美穂氏を特別講師に招聘し、多文化共生を目指していく上での考え方や、その先に描かれる地域の状態について考えるワークを実施した。

---

[2] 本事業において、グローカルとは「国境を越えた地球規模の視野と、地域の視点で、さまざまな問題を捉えていこうとする考え方」と説明をした。

[3] としま映像教育プロジェクト作品（豊島区）

[4] このワークでは、クラスの中にいる外国ルーツの友人の名前や、食べ物などが多かった。また、ニュースから得られる国際社会に関連するキーワードなども複数回答があった。

その後、参加者は映像制作を行う三つのグループに分かれ、どのようなテーマを取り上げ、作品を通じてどのようなメッセージを受け手に伝えるのかについて検討を行った。映像制作におけるグループワークの指導には、映画やテレビ業界で制作に携わる人材を映像講師として各班に一名ずつ配置した。また、各班におけるチーム形成を担う役割として、台東区の日本語学校[5]に留学をしている学生が各一名ずつ配置をし、異文化からの移住者の視点の共有も含め役割を担った。

留学生スタッフへのインタビュー練習

グループワークにおいてテーマとメッセージが確定した段階で、その表現をどのような対象を取材・撮影することで描くかの検討を行った。参加者から提案される取材対象者の多くは、学校内のクラスメートなどだったため、取材対象と設定することは難しいことから、参加者の提案の根底にある要素を大切にしながら区とスタッフの間で取材対象者の選定を進めた。

二日間にわたった取材・撮影活動においては、参加者がカメラで撮影をし、音声マイクで録音をしながら、インタビューなどを実施した。また、取材を終えた時間の中で振り返りを実施し、作品の構成について意見を交わすことを重ねた。

事業最終日には、講師によって一定程度編集を行った作品をグループ内で鑑賞し、作品の仕上げに向けた議論を行った。

取材活動（浅草モスク）

作品ポスター制作

その上で、ナレーションを録音、作品タイトルを確定し、完成をさせた。作品完成後には、参加者の保護者や取材に協力をいただいた方々などを招き、完成作品試写会を実施した。試写会では、会場準備やデコレーション、作品のポスター制作、司会進行を参加者が中心となって担い、40 名ほどの来場者に事業と作品について発表の機会を得た。

[5] インターカルト日本語学校

試写会準備

参加者による司会進行

試写会来場者と共に作品鑑賞

上映後に参加者から感想

試写会来場者から感想

映像制作事業スケジュール

実施日	項目	内容
2019 年 8 月 2 日（金）	プレイベント	グローカルの言葉の定義や、ワークショップの趣旨について確認。他地域の取組みを共有し、映像制作について理解を深めた。
9 月 7 日（土）	グローカル WS	専門家を講師に招き、多文化共生を進めた先の理想の台東区について考える機会を創出。後半では、次回に向けて映像制作のテーマについて話し合いを行った。
9 月 16 日（月・祝）	グループワーク	各グループに分かれて、映像作品の中で表現を行っていくテーマや、そのための取材対象を協議し、取材計画を策定。撮影機材の講習やインタビュー練習も実施した。
9 月 23 日（月・祝）	取材・撮影、振返り	取材計画に基づいて取材を実施。一日の終わりには振り返りを実施。
10 月 20 日（月・祝）	取材・撮影、振返り	同上
11 月 4 日（月・祝）	ナレーション録音 完成作品試写会	講師が編集を行った作品を確認し、修正について協議を行い、ナレーションを録音。その後に、取材協力者や保護者等を招き、完成作品試写会を実施した。

完成作品概要（要約文引用）[6]

1 作品目：Traditional 台東～祭りでつながるみんなの町～

この作品は、私たちの住んでいる台東区に年々増えている外国からの移住者の人たちと一緒に、どうやったら言語や文化を越えて、地域で暮らしていくことができるのかを考えることからスタートしました。

まず、インド人のカニシュク君とアカシャ君を訪ね、外国から移住してきた人の生の声を聞きに行きました。二人は台東区で楽しく暮らしているようですが、本当にそうなのか疑問です。

そこで、今度は地域の様子をよく知っている地域の警察に話を聞いてみました。すると以前、外国人と日本人の間でゴミ出しなどのトラブルがあったことを教えてくれました。しかし、この地域では、そうしたトラブルをどのように解決していくかの話し合いの場が設けられ、そこから外国人と日本人が一緒に地域の活動を行っていくことに発展をしたと教えてくれました。

今度は、外国人と一緒に地域活動を行っている日本人にも取材を行いました。この地域では、夜間パトロールを外国人の人たちと一緒にスタートし、そこから関係が構築されるようになったようです。夜間パトロールを一緒に行っているメンバーの方は、今は本当に良い関係が築けていることを教えてくれました。

次に、地域の町会長にも取材を行いました。この地域では、お祭りが盛んで、日本人と外国人が仲良くするために、お祭りが良い機会ではないかと考えたからです。お祭りは神様の行事なので、ルールなど難しいこともあるようですが、参加したい方を受け入れる気持ちを地域が持っていることを会長が教えてくれました。

カニシュク君とアカシャ君も子供みこしを担いで、地域のお祭りに参加したことがあるそうです。二人は、地域のお祭りに参加したことはとてもワクワクしたと感想を教えてくれました。また、彼らのご両親にも話を聞くと、日本に住んでいくのだから、お祭りを含めて色んな文化に触れさせていきたいという希望も話してくれました。

こうした取材を終えて、みんなで伝統を受け継ぎつつ、新しい関係を地域の中でつくっていくことも大切じゃないかと考えました。

---

[6] 本事業では、多くの区民に作品鑑賞をいただくために、文字情報で作品概要を理解できる要約文を日本語、英語、中国語で作成。

２作品目：ジェイシー・クリシュナ～空手でつながる物語～

作品は、映画制作のメンバー二名が通っている空手教室での経験に基づいてスタートしました。二人がいつも通っている空手教室では、様々な国籍の人たちが学んでいます。二人に年が近いインド人のプラナブ君もその一人ですが、二人にとっては少し年上で空手も強くて近寄りがたい存在。この映画づくりをきっかけに、プラナブ君のことをもっと知りたい、仲良くなれたら良いなという想いでプラナブ君と彼の家族を取材することになりました。

まず、様々な国籍や文化を持った人たちが空手を学んでいることについて、空手教室の先生にインタビューを行いました。空手教室では、日本人以外の人たちに対して、特別な配慮をしているかどうかについて先生に聞きました。

プラナブ君の家を訪ねてみると、プラナブ君の他に、お兄さん、お母さん、お父さんが待っていてくれました。家の中には、神様を飾っているところがいくつかあり、毎日お祈りをしていることを教えてくれました。

プラナブ君のご両親は 25 年前に日本に来ました。今は随分と環境は良くなったようですが、最初は、宗教上の理由で食べるものが限られていたため、苦労したようです。

プラナブ君に空手を習わせた理由としては、お父さんがインドに住んでいた時に空手を習ったことがあったこと、そして空手教室には日本人が多い為、日本人の友達が沢山できることを期待していたことを教えてくれました。

プラナブ君のお父さんは、話してくれた話の中で、遠いよりも近いところを探していくことで、人と人は仲良くなることができるという、多文化共生に大切なことを教えてくれました。

取材の最後に、プラナブ君から近しい間柄で交わす「ジェイシー・クリシュナ」という挨拶を教えてもらいました。

3 作品目：魔法のスパイス～みんなが仲良くなるために～

この作品は、学校で給食を食べないでお弁当を食べているパキスタン人の友達をもつ映画制作のメンバーの疑問からスタートしました。なぜ給食があるのに、お弁当を持ってきているのか、そのことをテーマに区内に住んでいるインド人とパキスタン人の人たちに取材をすることにしました。

はじめに取材に訪れたのは、インド人のパテルさん一家。パテルさんの家では、宗教上の理由でお肉やお魚などは食べないようです。ただ、インド人がみんなそうではなく、パテルさんの信じているヒンドゥー教の教えであることを教えてくれて、宗教と食べ物は関係していることがわかりました。パテルさんの息子さんは、食べ物の表記がわからず、食べた際の違和感で気が付いたこともあったそうです。

次に取材に訪れたのは、パキスタン人の人たちが集まるイスラム教のモスクでした。イスラム教では、豚肉は食べないようですが、その他はハラールというイスラム教のルールを守ってつくられた食材を食べるようです。今回は、そのハラールの鶏肉を使って、みんなでパキスタンのカレーを作ることになりました。

みんなで美味しいカレーを食べた後に、日本での生活で困ったことなどをインタビューすると、食べ物の入手方法で苦労したが、日本人がとても親切であると言ってくれました。

モスクでの取材を終えて、改めて色んな国籍や文化の人たちが一緒に地域で暮らしていくためには、どのようにしたらいいかをみんなで考えました。学校にいる外国人の子たちに日本語を教えてあげることや、地域の中で助け合いの関係をつくっていくこと、さらには今回のカレーのように、美味しいものを一緒に食べることなどをみんなで話し合いました。

参加者の感想

事業の参加者に完成作品試写会終了後に以下のアンケートを実施した。
（所属と学年は事業実施年度当時）

【質問１】グローカルシネマ大作戦に参加した感想

- 最初は緊張したけど最後はみんなと仲良くなってよかった。（石浜小６年）
- 外国人との接し方がわかった。（台東育英小５年）
- グローカル大作戦に参加して、本格的なことが知れて良かった。（忍岡小５年）
- もっと外国人と交流して、たくさんの言葉を少しでも話せるようになりたい。カレーが美味しかった。（金曽木小５年）
- いろんな国のことを知れた（根岸小６年）
- いろいろ楽しかった。（黒門小５年）
- 90ヵ国の人たちの台東区での過ごし方や気持ちを知れてよかった。（石浜小６年）
- お祭りを通して、外国人と日本人の関係、台東区の歴史を知ることができ、良かったです。（上野中１年）
- とても楽しかったです。グループの仲も良くなったので、これで終わりなのは寂しいです。（浅草中１年）
- 世界各国のいろいろな文化などが知ったりできて良かった。（上野中２年）
- とても楽しかったです。撮影など普段の生活ではできない、貴重過ぎる体験ができてとても感謝しています。また次があるなら参加したいです。これからの生活では、外国の方との交流を大事にしたいです。（上野中２年）
- 他の宗教や文化のことについて理解でき、それと同時にこれから来るであろう外国人との交流の仕方がわかったので良かったです。（上野中２年）
- 楽しかった。難しいこともあったが、良い経験ができた。（上野中１年）
- 色々な文化を知って、すごく楽しかったです。（御徒町台東中１年）
- 次はモスクで上映を行いたい。（柏葉中１年）

参加者が制作した作品ポスター

【質問２】作品を観た感想

- みんないい映画でびっくりした。（石浜小６年）
- それぞれの作品は、どれもすごかった。（台東育英小５年）
- 取材をして楽しかった。（忍岡小５年）
- みんな自分の意見をしっかりと言い、楽しい映画を作っていた。（金曽木小５年）
- 他の人の作品も完成度が高くてすごい。（根岸小６年）
- 意外とすごかった。（黒門小５年）
- 空手やスパイスなど外国人の関係は色々あると思った。（石浜小６年）
- それぞれのグループの個性が出ていて面白かったです。自分のグループでも自分の想像を超えていきました。（上野中２年）
- 自分の班とまったく違っていて、面白かったです。（浅草中１年）
- 全然違う視点から見ていたけど、これも多文化共生なんだと思いました。（上野中２年）
- 自分が気になっている文化を知ることができて良かった。（上野中２年）
- 自分が撮った映像や声が流れていることに、感動しました。映画といっても、色々な視点があって面白かったです。（上野中２年）
- 他のグループの疑問や分かったことが聞けたので良かったです。（上野中１年）
- みんな違うテーマでどの作品も良かった。すごかったです（御徒町台東中１年）
- みんなすごかった。言いたいことはメイキングで話しました。（柏葉中１年）

【質問３】その他、台東区がどんなまちになってほしいかなど、なんでも

- みんなが仲良くなって平和な町になってほしい。（石浜小６年）
- 外国人も住みやすい町（台東育英小５年）
- カレーを食べ損ねたので、またモスクでみんなと食べたい。（忍岡小５年）
- モスクでカレー付き上映会をしたい。（金曽木小５年）
- パキスタンのカレーを食べながら映画を観たい。（根岸小６年）
- とにかく、いいまちになってほしい。（黒門小５年）
- お店とかの看板が 90 か国の人が読めるようになってほしい。（石浜小６年）
- 海外との関りが深いまち。優しく接することができるまち。（上野中２年）
- この町がより良くなるために、外国人の文化、日本の文化のいいところ全部が集まるようになってほしい。（浅草中１年）
- もっと外国人の人と仲の良い区になってほしいです。（上野中２年）
- これからの台東区、みんな平等で明るいまちになってほしいです。（上野中２年）
- 区民全員が台東区の歴史、文化を知り、それを受け継ぐという流れができてほしい。また、外国の文化と日本の文化を共有できる場が増えてほしい。（上野中２年）
- 次はもっとスケールを大きくしたり、人数を増やして行いたいです。（上野中２年）
- 外国人にもっと来てほしい。（上野中１年）
- あたたかいまち。（御徒町台東中１年）
- 多文化共生のまち（柏葉中１年）

小括

本事業では、子どもたちが多文化共生の担い手としての意識を醸成し、彼らが感じた視点や考えた思考を映像メディアで表現をすることを試みた。作品が完成し、事業を振り返ると、当初描いた企画は概ね達成できたと認識している。

他方で、事業を進めることによって、企画段階では想定されなかった課題に直面することも少なくなかった。その一つとして挙げられるのは、テーマに即した取材候補の選定であったことは、全グループ共通して直面した課題でもあった。

参加者の目線や視点を優先する場合に、具体的な取材対象者が出てくることの限界は常に有しており、それは子どもたちが生活しているコミュニティの範囲と関わることであり、致し方ない点が多い。そうした場合、協働をするスタッフの役割として取材対象を提案することが理想ではあるが、子どもたちの関心テーマに即した対象者を柔軟に検討できる候補は限定的であった。在住外国人コミュニティと日常的に接点を持ち、コミュニケーションをはかっていくことが、こうした取組みの際に有用な人材リソースを確保することであると認識をした。

また、成長段階の異なる参加者が、グループワークを行うことの難しさは、各グループ共に直面をしていた。小学校と中学校では、言語や思考レベルが偏在していることや、大人でも容易ではない「多文化共生」を考えることは、各グループにとって議論が深まらない大きな要因でもあったが、同時に大きな挑戦でもあった。

しかし、各グループにおいて中学生が低学年を牽引し、講師やスタッフの良き理解者としてグループワークを支える役割を担ったことが見受けられ、結果的には多様な考えをグループ内で共有する枠組みになったと総括している。

事業においては、良いことも、難しいことも含め、様々な気付きが溢れていたが、結果として企画の概ねの達成を支えたのは、一般公募によって自ら参加を希望した全ての参加者のモチベーションの高さの賜物であった。

映像作品上映ワークショップ事業

目的

映像作品上映ワークショップ事業においては、多文化共生をテーマに小中学生が制作したドキュメンタリー作品の上映会（グローカルシネマ上映会）を開催し、上映後に参加者同士が作品の感想や自身の体験などを共有する場の創出を目指す。また、身近な在住外国人とコミュニケーションをはかるきっかけ作りの一助となることを目指す。

対象者

本事業では、台東区民を対象とする他、本事業に関心を寄せる区外からの希望者も適宜受入れを検討することとした。

実施形式とスケジュール

本事業では、令和元年度内に 3 回のワークショップ開催を計画した。ワークショップは、①グローカルシネマ大作戦の説明（全体事業)、②作品上映（3 作品)、③メイキング作品上映、④グループ別対話、⑤全体共有、の流れで実施した。

新型コロナウィルス感染症による影響を受け、令和 2 年 3 月に予定していたワークショップは中止になったが、合計 2 回のワークショップを実施した。

グローカルシネマ上映会実績

実施日時	参加者数
2019 年 12 月 7 日（土）13 時～15 時	12 名
2020 年 1 月 31 日（金）18 時 30 分～20 時 30 分	41 名
2020 年 3 月 2 日（月）10 時～12 時	新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため中止

参加者の感想

各グローカルシネマ上映会の終了後に参加者に以下の質問アンケートを実施した。

第一回グローカルシネマ上映会

【質問 1】上映会は何で知りましたか？

- 友人の紹介
- 区役所
- 関係者の紹介
- サークルやまとことば（日本語学習支援ボランティア団体）のフライヤー
- SNS
- 町会回覧

上映会参加者募集チラシ

【質問２】上映会はいかがでしたか？（感想など）
・ 子供の目標と大人の目標の両方から多文化共生について知ることができて良かった。
・ ３作品それぞれの切り口が素晴らしいです。
・ その後のグループディスカッションで色々な視点・考えを聞けたのがより良かった。
・ 何気なく生活している日本人にとって、外国の人は大変苦労しているとのことでした。
・ とてもよかったです‼（自分たちでもぜひ上映会をしたいと思いました）
・ 「ジェーシークリシュナ」が特によかったです。この作品の制作を通じた作り手の子と取材を受けた子との新しい関わりが生じたことが素晴らしかったです。
・ ３作品共、短く難しいカットを子供の目線で素直に撮れていると思います。最後の作品は、パキスタンの方々がとても好意的に協力してくださったと思われ、子供達の素直な心が伝わった用に思われました。
・ 作品制作の背景の説明やグループでのシェアなどあり、作品を通して多文化共生を考えるきかっけとなりました。

【質問３】印象に残った作品やシーンはありますか？
・ 神輿に対するルールというシーン。違いより近いを探す。
・ １作品目の防犯パトロールを外国人と一緒にやっている高齢者の言葉「人間、ヒューマンですよ‼」。２作品目の「違いを感じると遠くなる、近いを感じると近くなる」。３作品目の「多文化共生は美味しいものを一緒に食べること」など。素敵な言葉を頂いた。
・ 違いを探すのではなく、同じを探す。
・ ２作品目の「違うところを探すのではなく、同じところを探す」という言葉。全体的に子供たちの笑顔がよかった（新しい体験、新しい知識を知ったことに対する）。
・ 「ジェーシークリシュナ」のヒンドゥー教の一部の神をたたえる事を初めて知りました。
・ プラナブ君のお父さんがお話しされた「違いを考えると離れていく、近いところを探していこう」
・ 「ジェーシークリシュナ」で、作り手の子が少し緊張しながら、ズボンをつまみながら、相手の子にインタビューしている２ショットのシーン。家に行って、その子の生の時間に触れられたこと。最初の作品の日本人の大人の方はどちらかというと外国人が日本人に合わせてくれればというような意識だった感じを受けたが、その後の２本の作品も含めて、子供たちはこちらも外国の方に合わせていくんだという意識が感じられてそれもよかった。ポスターも素晴らしいです！
・ ２作品目のインドの男の子と日本人の男の子のこれからの付き合い方（仲良くなれるシーン）
・ 相互理解が生まれたときのお子さんの表情が豊かで印象に残りました。日本人のお子さんにとっても地域掘りおこしになっていたように感じます。

【質問４】今後、作品をどのように活用することが良いと思いますか？
・ 小中学校での多文化共生のための授業
・ 図書館や役所のロビーなど、人の集まるところに何気なく放映しても、人の目を引くものがある

と思いました。もちろん台東 CATV にも。

- 小中学校での上映会。多文化共生を考え、話し合うための入り口
- 区役所１階などで常に上映（流す）など。
- 台東区のホームページや YouTube に載せて短編映画として活用できればいいと思います。
- たくさんの場所で上映‼
- 今回は、インド、パキスタンの方々宗教の問題や生活の違いなどを表現していました。他、ベトナム・タイ・アジア・の方々との作品を創る手がかりになればと思います。
- 学校教育の場の活用

参加者による感想共有

【質問５】その他（多文化共生のまちづくりのアイディアなど、何でも）

- お互いのバックグラウンドが共有できればとてもいいことだと思う。
- 第２作目「空手を辞めた〇〇くんのその後」など。多文化共生をメインテーマにするのではなく、祭り、アート、料理など」の１つの目的でいろんな国の人が集まって、多文化共生はひとつの隠し味が良いかもです。
- 食事も一緒にできると楽しいですね。（ハラルカレーとか）
- （私自身の問題かもしれませんが）「多文化共生」という言葉のわかりにくさから克服するのも一つおのアイディアかと思います。（より平易な言葉に置き換えるか、対になる言葉との比較からイメージしやすくさせるかなど）
- 色々な国の人の紹介を積極的に紹介してください。係の方でお願いします。
- 制作チームのメンバーも外国ルーツの子が何人かいたようだったので、メンバー間で作りながらどのようなコミュニケーションが生じたのか気になりました。あと、映像の「作り方・形式」をもっと子供達にゆだね、解き放ってもよいかなと思いました。
- アイディアは浮かびませんが、大人の手伝いを借りずに、中学生だけ、高校生だけ、または、小中高と参加する子供達が増えることを願います。子供、特に JK の目線なども見てみたいです。…希望です。

・ （グループ内で出た意見）多文化コミュニティを大人がつなげていく。地域と異文化コミュニティをつなぐ入り口を作る。やさしい日本語。

第二回グローカルシネマ上映会

参加者同士のグループワークの様子

【質問１】上映会は何で知りましたか？
・ SNS
・ 友人・知人から
・ 町会回覧で知った
・ 関係者による紹介
・ 区からの連絡
・ お子さんが事業に参加していた
・ 作品に出演協力をした
・ 大学教員からの紹介
・ インターネット
・ 区広報

【質問２】上映会はいかがでしたか？（感想など）
・ 子供たちが頑張っている姿がみれてよかった
・ とても素晴らしい作品で、数日間でここまで作るファシリテーション等あちこちで同じような企画があればいいのにと思いました。
・ 子供たちの異文化がよくわかりました。
・ 子供たちがとても優秀。映画にするスタッフにスキルがあるんだろうなと思った。
・ 非常によかったです。見た後感想を共有できたこと。作った子供たちがグループに入っていたこと。

- メイキングがみれてよかった。(他の班はこんな感じかと驚いた)
- ３作品共、短く難しいカットを子供の目線で素直に撮れていると思います。最後の作品は、パキスタンの方々がとても好意的に協力してくださったと思われ、子供達の素直な心が伝わった用に思われました。
- とてもよかったです。
- 今日はみんなの人がみてくれてすごくうれしかったです。
- まだ見れていません。メイキング映像を見ることができて、活動の内容の様子が知れてよかったです。
- 外国籍の方々に距離を感じている子供たちが映画作りを通して外国の方々にふれあい、身近に感じ考えるように成長した点がとても興味深く感じました。
- 映画はもちろん見た後に話合えたのがよかった。
- とても上手にできていたこと
- とてもよかったです。
- もっとたくさんのひとに見てほしい
- 子供の興味をもとに地域のことを調べていくプロジェクトはこどもにとって深い学びとなっていると感じた。
- 外国人の文化について映像をつくったのがとてもよかったです。
- ふだんできない体験ができた。
- いろいろな外国人が色々なことがあって面白かったです。
- people are people we should not make differents.（人は人であり、異なるものとするべきではない。）
- グローバル化が進んでいて素晴らしいと思いました。
- 様々な人が集まってくださり有難かった。子供たちの経験のために参加させていただいたのですが想像を超えた映画で多くの方にしっていただけてうれしかった。
- 映画を見てそれについて話す時間があるというのがよかったです。
- 2度目でしたがそれでも楽しめました。
- とてもよかったです。撮った子供たちが司会進行できるといいですね
- メイキングを含めとても興味深い映画でした。
- とても面白かったです。ぜひ他にも上映の機会を作っていただきたいです。
- とてもおもしろく考えさせられました。
- 取り組み自体が「互いを知る」きっかけとしてとても素晴らしいと思いました。参加した子供たちの人生のターニングポイントになったと思います。
- 映像はアウトプットで素晴らしいものでそのプロセスが素晴らしいと感じました。同じところに目を向け仲良くなる。シンプルで大事なことだと思いました。
- とってもいいと思いました。

【質問３】印象に残った作品やシーンはありますか？

- インドの家庭を訪問した班が幸せそうだったけど、まだまだ何かあるかもと言っていたところ。
- 家の中にあるヒンズー教の神々、東京で自分たちの宗教を続けていく美しさを感じました。
- メイキングがよかった。
- ちがいではなく、近いところを探す。
- インタビューが上手で驚いた。子供目線の発言と大人に負けない発言。両方あって素晴らしい。「遠いより近い」「僕のことどう思った？」
- プラナフ君のお父さんの「遠いより、近い所を探す」のところ
- ２作品目のインドの男の子と日本人の男の子のこれからの付き合い方（仲良くなれるシーン）
- ”ちがいでなくちかいことをさがす”のシーン
- パキスタンで日本のごはんを食べない理由がしれたシーン
- 子供たちの本音が出ていた場面。インドの方の共通点を見つけることで近くなるという話の場面。パトロールの男性、３名のうちセンターの方面白かったです。
- 空手をやっている男の子同士で「僕のことどう思ってた？」と聞きあってたシーン。直接本人に聞いてるってすごい。
- 参加者の友達が空手をやめるってしってもっと近くなったのが興味あった。
- 子供たちの話し合いがいいところ
- メイキングがよかった。
- 家を訪問した際の神具のシーンが印象的。給食で弁当を持参する理由を日本児童が知らなかったこと。
- 空手道場でスポーツを通して交流するのはとてもいいことだと思いました。
- 違いを考えると離れていくという言葉とそれに対する子供の対応
- みんなが自信をもって頑張っていくこと。
- 外国人の方も参加できるような新しい祭りを作っていきたいとの発言が印象に残りました。
- お互いに似ている文化を知ることで良いコミュニケーションを心掛けるイメージ
- インドのご夫婦に女の子がインタビューするシーンでノートを見せたところ「読めない」と言われたところ。
- 子供たちが小さな疑問を解決していく姿がみれたところ
- ３つ目の作品で日本人はとてもやさしい、感謝しているという発言をしている子供
- 「自分が違いを考えると離れてしまう。何が近いか考えること。」
- 子供たちの本音の中にとまどいと興味が見えておもしろかった。空手をやっていた男の子がインド人の男の子に質問していたところ、インド人の父親が日本人と近い所を探すといったところが印象的でした。
- メイキングでの子供たちが意見を交わすところが印象的でした。ぜひ本編と合わせて上映していただきたいです。
- インドのお父さん「違いではなく、近い所を探す」
- 夜間パトロールの方が「ふつうですよ、われわれと同じヒューマン」発言。ドキュメンタリーで

サポートの方が外国とかじゃないよね、みんなと同じ感覚と言っていたところ
- それぞれで良いと思っていたけど、みんな同じになっていくことも良いと思ったという男の子の言葉
- 空手をやっていたシーン日本文化にもっと参加してほしい

【質問４】今後、作品をどのように活用することが良いと思いますか？
- たくさんの大人に見せてほしい。子供から伝わるほうがいいと思う。
- 作った子供たちがどう考えているのか知りたい。
- 外国で上映、オーストラリアの例とかもみてみたい。
- 学校内での上映会・ディスカッション。保護者会で
- 他の人にも、もっと見せたい
- 今回は、インド、パキスタンの方々宗教の問題や生活の違いなどを表現していました。他、ベトナム・タイ・アジア・の方々との作品を創る手がかりになればと思います。
- とてもいいです。
- 小学校や、中学校にこの映画を広めたい。
- 学校で上映教材に
- 区内小中学校での上映
- まず、区内のいろんな人（町会、PTA、区職員全員）に見ていただき、見た後に話し合っていただくとよいと思います。
- 外国の人にも見せてあげる
- 上のクラスとやって行くのは良いと思います。
- 日本にある外国人の学校など
- 学校の給食学習に利用。若いママさんの子育てサロンで上映。自治会の研修会で活用。
- 幅広い場所での上映
- ビデオだけでなくてみんなで活用もよくできていたと思いました。
- in school （学校で活用する。）
- 区内でこれだけの異文化に接することができることも知っていただけるいい機会だと思います。
- 小中学校の道徳の教材にいかがでしょうか？
- 今日のように地域の人たちが集まって対話する場がたくさん作れるといいと思います。
- 上野中学校では、すでに校長が学校全員に見せてくださいました、時間の関係で１本のみ上映。全員に上映すると子供たちの興味が膨らむと思います。
- 多文化共生を学んでいる大学の授業への出張授業
- もっと多くの人に観てほしいと思いました。
- 小中学校で教材として活用するのもよいと思います。
- 学校・保護者会で
- 総合の時間・放課後
- 小学校の放課後
- 旅行者の人にもインタビューしてみたらと思いました。

グループ内で対話したことの全体共有

【質問５】その他（多文化共生のまちづくりのアイディアなど、何でも）

- 目立つ外国人だけでなく在日コリアン、中国の人も多く暮らしてきた台東区の歴史にも目を向け、多文化共生を考えるプロジェクトがあるといいと思います。
- アイディアは浮かびませんが、大人の手伝いを借りずに、中学生だけ、高校生だけ、または、小中高と参加する子供達が増えることを願います。子供の目線なども見てみたいです。…希望です。
- 作品のチームのこどもたちみんなにあえたらなとおもいました。
- お料理教室
- 同じ班のネパール出身の方の話の通り、国籍に関係なく一緒に何かをするのが有効だと思いました。本日は参加させていただきありがとうございました。
- たくさんの子どもたちからアイデアを募ったらいいと思います。
- 外国と日本の人が一緒に仕事や祭りをやる。
- どこの役所でもやっていくのはいいと思います。
- 町でイベントを行ってほしい
- 外国にルーツをもつ子供が日本社会にインタビューするパターンが見たい。
- Think about others and Don’t be shy because you be good friend!（恥ずかしがらずに相手のことを考えてみよう。きっと良い友人になれるから。）
- インタビューを受けた子どもたちも「日本人」であると認識できるような社会を築いていきたいと思いました。
- 外国の方に上映するのもよいと思います。
- 地域で文化祭や運動会をやっても楽しいと思います。
- 台東区に限らずぜひ他での上映をお願いします。
- 参加した子供たちがこれから何を考えて生きていくのか気になると思いました。
- やさしい日本語を活用するのも良いと思いました。

担当課より映像制作事業の参加者に感謝状の贈呈（第二回上映会会場にて）

小括

本事業では、多文化共生をテーマに小中学生が制作した映像作品を鑑賞し、それらを題材に鑑賞者が地域の多文化共生について意見を交わすことを目的とした。新型コロナウィルス感染症の影響により、当初予定していた回数の実施は叶わなかったが、実施した回においては、企画段階の目的を概ね達成することができたと認識している。

グローカルシネマ上映会に参加をいただいた方々からは、事業に対しての理解や賛同の声を多くいただいたことは、地域における多文化共生施策への関心の高さが伺える。参加者の多くは積極的に意見交換に参加をし、それぞれの体験に基づく意見や他者の話に傾聴し、多文化共生の可能性について対話が行われた。

企画段階では、上映会の対象を「区民全般」としつつも、期待としては「地域の中で多文化共生へ積極的ではない方々」が参加できる場を目指していた。他方で、実際に上映会を開催してみると、日常的に多文化共生への意識が一定程度有している方々にとっても、多文化共生について語らうことのできる「対話の場」が限定的あることが、上映会での意見交換やアンケートから伺うことができた。

今後の課題としては、多文化共生などに関心の高い方々以外の層にもしっかりと情報やメッセージを届けていく工夫が求められている。特に、「グローカルシネマ」や「子どもが制作した」など、一般的ではない取組みを理解いただくことの工夫は不可欠であると考えている。

このような課題は残しつつも、2020 年 1 月 31 日に実施された第二回グローカルシネマ上映会では、仕事帰りの方、夕ご飯の準備をしてから来た主婦、区議会議員、大学教授、研究者、制作に携わった子どもたち、外国ルーツの子ども、保護者など、多様な方々が参加いただき、地域の多文化共生について対話を行った。その光景は企画段階で描いた場のイメージを越えていく対話の場であったと感じている。

おわりに

今後に向けた検討課題

■ 多文化共生の地域づくりに向けた子どもたちとの協働

本事業において、子どもたちが参画をしたことは、事業の目的達成に大きく寄与された。多文化共生の推進においては、本事業のようなイベント的な携わりに限らず、持続可能な枠組みの中で彼らとの協働を行っていくことを検討に値すると考える。子どもたちが持つ気付きや柔軟な発想との協働をしつつ、地域づくりを進める枠組みが増えれば、多文化共生にかかわる多くの課題解決にも力強い担い手になると感じている。

■ 様々なコミュニティとの接点の創出

多文化共生施策を進めるにあたっては、様々なコミュニティとかかわりを持つことが求められるが、本事業においてもその重要性を感じる機会が多かった。日本語を母国語としない層やコミュニティへの情報発信などは大きな課題となるが、日常的に様々なネットワークを構築することによって、接点が創出される可能性もある。子どもたちしかアクセスできないコミュニティや保護者、SNS などを活用することも有用な可能性がある。

成果物

本事業における成果物は以下に列挙する。

1. グローカルシネマ DVD　80 枚（参加者、取材協力者、関係諸団体などへの配布分相当）
2. 事業報告書
3. 台東ケーブルテレビにおける事業並びに作品紹介番組の放送
   （ア）令和 2 年 2 月 23~29 日　グローカルシネマ上映会紹介番組（全 6 分、1 日 4 回放送）
   （イ）令和 2 年 3 月 22~28 日　グローカルシネマ大作戦！作品ダイジェスト番組（全 20 分、1 日 4 回放送）
4. YouTube への掲載
   （ア）一般社団法人リテラシー・ラボ公式チャンネル（全作品、メイキング映像）
   （イ）台東区公式チャンネル(台東ケーブル TV 放送グローカルシネマ大作戦！ダイジェスト番組)

謝辞

本事業では、報告書に書き切れない方々のご協力とご指導をいただき、事業を実施に至ることができた。特に、事業担当課である台東区区民課の職員の皆様からは、事業計画段階から様々なアドバイスをいただき、事業採択以降は強い想いを持って協働を進めていただいた。事業実施に向けて、地域における現況や取組みなどを把握するために、多くの個人・団体とつなげていただいたこと、共にヒアリングを実施したことは、映像作品に直接反映することは無くとも、事業実施において重要な役割を果たしたと感じている。

また、区民課を介して多くの方々のご紹介をいただいた。区内で実施されている日本語教室や外国ルーツの子どもたちが多く所属する学校関係者など、事業を練り上げていく段階において、幅広い視

点を得る機会をいただいた。

町会組織の方々にも本事業へのご理解とご協力を賜った。本事業においては、地域コミュニティと外国人の接点が企画の段階から重要視していた中で、実際に地域コミュニティの中心となっている町会組織の方々のご協力なくしては意味を成さない取組みでもあった。

そして、本事業に参加いただいた方々なくしては、本事業がここまで豊かな取組みになることはなかったと感じている。特に、取材活動と映像制作に取組んだ小中学生の参加者は、地域や未来について自分事として捉え、時に悩みながらも、彼らにしかできない役割を果たしていただいた。

本事業に関わり、地域の多文化共生施策を推進し、参加者と共に伴走をいただいた全ての方々に心からの敬意と感謝を申し上げたい。

平成 30 年度台東区協働事業提案制度採択事業

グローカルシネマ大作戦！

～世界 90 ヵ国の人が住む僕たちのまち台東区～

事業報告書

令和 2 年 3 月 31 日　発行

発行元：一般社団法人リテラシー・ラボ

〒156-0044　東京都世田谷区赤堤 4－36－19 根岸ビル 301

TEL：050-5275－8345

E-mail:info@literacy-lab.org HP: http://literacy-lab.org/